

## 巻頭言

著者	青山 ヒフミ
引用	大阪府立大学看護学部紀要. 2010, 16(1)
その他のタイトル	Foreword
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/9720">http://hdl.handle.net/10466/9720</a>

# 巻 頭 言

大阪府立大学看護学部学部長 青山ヒフミ

科学技術の進歩とともに保健・医療等，多くの分野もまた高度に専門分化してきております。看護学はその当初から「実践の科学」として，実践に根ざした研究，教育であり続けることを大切にしてきました。同時に実践においては，EBN（Evidence-Based Nursing）として，研究成果，エビデンスに基づく実践の重要性が強調されております。つまり，看護において実践，研究，教育は密に相互に絡まりあい，支持しあい，影響しあって発展してゆくものといえます。

さて，EBNはエビデンスを「つくる」「つたえ」「つかう」の3つの要素から成り立っているといわれています。大学において研究成果を「つくる」働きが，さまざまなツールによって「つたえ」られ，研究成果が看護実践の場で「つかう」ことができるようになるためには，その3つの働きのどの部分も欠けてはならないものです。

大学においては，研究成果，エビデンスを「つくる」ことは教員の基本的な責務であり，教員の頭の中では常に研究シーズを探り，研究方法のアイデアを捜し，成果を産み出そうとしております。また，「つたえ」るでは，学会，学術雑誌，本などさまざまなツールがあり，さらにデジタル技術の革新によって，より速く，より大量に伝えることが可能となりました。今では国内外を問わず，論文の抄録とともに多くのフルペーパーも瞬時に手元に届く時代となりました。「つたえ」られた研究成果，エビデンスが，実践の場で「つかう」環境が整ってきたといえます。

本学部の紀要は，一昨年度より投稿資格が，大学院生および大学院修了者（看護学研究科）まで拡げられております。本学部の紀要が発信の母港となって実践の場へ「つたえ」られ，「つか」われることを願っております。